
家庭教師ヒットマンリボーンと虹の守護者

チョモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリボーンと虹の守護者

【Nコード】

N3475Z

【作者名】

チヨモ

【あらすじ】

主人公・葛原ユウは、数少ない虹の属性を持った、少女だった。リボーンは、ユウの正体にきずいた。ユウは、世界を守る73（トリニッセテ）の守り人だった……。ツナと守り人たちの物語がここに、始まる。

登場人物紹介来る！

主人公

葛原 ユウ （くずはら ゆう）

性別 女

年齢 14歳

性格 少し天然、子供っぽいけど仲間思い

一人称 オレ、私

二人称 名前、苗字

誕生日 7月24日

髪の色 茶色

目の色 アクアブルー

髪型 ポニーテイル

身長 145cm

体重 35kg

家族構成 姉

武器 妖刀天竜 （ようとう てんりゅう）

属性 虹

説明 アルコバレーノの上に、立つもので、ボンゴレ虹の守護者である

あとトリニセツテの、人柱の一人である

裏社会では、「天界の使い者」と呼ばれている

武器の能力は、話の中で解ってきます。

人の心が、少し読める&人の気持ちを読める。

大抵自分のことは、「オレ」と言うが時々「私」になる。

しゃべり方が、男の子っぽい時と、子供っぽい時など様々変わる。

両親は、他界しており、家族は姉のみ

主人公の姉

葛原 麗華 （くずはら れいか）

性別 女

年齢 18歳

性格 クールで興味が無いものは眼中にない

一人称 私

二人称 名前、あだ名

誕生日 9月10日

髪の色 青っぽい銀髪

目の色 マリンブルー

髪型 ロングヘア

身長 165cm

体重 40kg

家族構成 妹

武器 拳銃

属性 虹

説明 本当は、自分がアルコバレーノの上に立つものであり

妖刀天竜も自分が、持っているもつだた。

ヴァリアーの、虹の守護者。

裏社会だと、「紅の女王」くれないのじょうおう

結構腹黒くなります。特に、自分の気に入った物に何かされるとなります。

麗華はヴァリアーの虹の守護者です。

武器の説明は話の中で、

妹のユウウらんでいる。

主人公の親友

赤神 リュウ (あかがみ りゅう)

性別 男

性格 獄寺みたいだけど、お人良し

一人称 俺

二人称 名前、苗字

誕生日 12月12日

髪の色 きれいな銀色

目の色 茜色

髪型 短髪のツンツンヘア

身長 168CM

体重 55Kg

家族構成 両親

武器 大弓

属性 大空

説明 ボンゴレの上に、立つもので、

ユウと同じく、トリニセツテの人柱の一人

裏社会では、「白き破壊神」と呼ばれる。

武器のことは、話の中で、

ユウのことを慕っている。

時々ユウのストッパーになることもある。

門外顧問として動いてる。

バジルと結構仲がいい。

登場人物紹介来る！（後書き）

ユウ達の性格が（しゃべり方などがよく）本編で少し違う時もある
かもしれませんが、

気にしないでください。

本編では、もっとキャラが出てきます

その時は、後書きに書いときます。

プロローグ 虹の少女現る！

「ここが、並盛中か」

オレ、葛原ユウ

一応、女です。

確か、来たらすぐに、職員室に來いって言ってたな。

「あ、ヤベ場所わかんない。」

誰かに聞くか

お、そこに女の子発見！

「あの、すみません。」

「！は、はい！」

え、なんで、顔が赤いの？？（ユウは、天然です

「職員室ってどこですか？」

「えっと・・・」

そのあとに、丁寧に説明してくれた。

「うん、わかった、ありがとう」

「／／／／お礼を言われることじゃ、ないので・・・失礼します。」

わあ、ダッシュで逃げられた。

まゝいっか職員室の場所もわかったし、いくか。

ゝツナサイドゝ

「おはようございます！十代目！」

「おはよ、ツナ」

「おはよう、獄寺君、山本」

「早く席に着けゝ」

「今日は、転校生を紹介するぞ」

どんな子だろ？

「入って来い。」

「はい」

ゝツナサイド終ゝ

「入って来い」

「はい」

「葛原ユウです、よろしく。」

「席は、沢田の隣だ、沢田手挙げろ」

「はい」

ふうん、いいところに座れるじゃん。

「えっとよろしく、沢田」

「よろしく葛原さん」

くプロローグ終く

プロローグ 虹の少女現る！（後書き）

あゝユウって、こんなのだっただけ？

「そんなの聞いてわかるか」ですよね、すみません。
まゝ頑張って書いていきます。

つかツナサイドやった意味無いな（ガーン）
やるんじゃないかった。

第1話 リボーン来る！

＼ホームルーム終＼

「ユウちゃんって、何処から来たの？」

「どの辺に住んでるの？」

「えっと」

あゝ、また何で質問攻めにされてんのかなオレ
何でこんなにも、女の子ってこんな事聞くんだよ。
オレは、何かしたのかよ。

オレは、そんな事を考えていたら、救世主（？）が現れた。

「まあまあ、そこまでにしてやんなよ。」

「山本君が、言うなら。」

こいつじゃいけないんだ

「ありがと」

「どういたしまして」

「名前は、君の名前は、ナニ？」

「オレの名前は、山本武だよろしくな」

「よろしく山本」

「こちらこそ」

山本という奴に興味がわいた。
隣の席の沢田にも興味がある。

あ、次の授業って何だろ

丁度、沢田が来たので聞いてみるか

「沢田、次の授業って何かしてるか？」

「う、うん数学だよ」

「サンキュー」

「何、十代目に聞いてんだよ！」

「は？」

「ご、獄寺君！」

なにコイツ

オレの仲間に似てやがる

マジで似てる

姿とかじゃなくて、
感じがめっちゃ似てる。

「黙っててください、このアマ、絶対にしめます。」

「な！」

「（獄寺君なに言ってるの、葛原さん次の授業を、聞いただけなのに）」

「……。やる前に名前、名前を教えて。」

オレを倒すとか馬鹿だ

「ち、獄寺隼人だ」

「じゃ、戦うなら、放課後ね。」

「（コイツやっぱり、天界の使い者だ）」

わくばれてる、やばくない
なんで、人の心が読めるっかて
まゝいつか教えます。

「な！葛原さん戦えるの！」

「二様」

この気配は、リボーンか

「チャオッス！」

「……。」

「リ、リボーン！」

「そんな事より、なぜこんなお前がいる」

「……。君は、私の正体に気づいて聞いているのかい。」

沢田たちは、言っている意味が分かってない

リボーンの奴教えてないな
教えてるわけ無いよな

「沢田その赤ちゃん何処から来たの
もうすぐ授業始まるから、どうするの」

「話を逸らすんじゃない」

「リ、リボーンダメだよ」

「みんな席につけ」

よっしゃ！先生良いタイミングできた！
リボーンから逃げれる！

「しょうがね、また来るぞ」

「「（もう来るな）」」 ツナ&ユウ

沢田大丈夫か、方程式は出来るようにしようよ。
(数学の授業のとき、ユウはひそかに思った。)

〽放課後〽

「で、どうやって戦うの？」

あゝやる気無いなゝ

でもなゝやるっていちやったもんな

「……。真剣勝負に決まってるんだよ！」

「あつそ、じゃあ始めよ。」

しょうがない、さっさと終わらせよう
殺さない程度にやればOKだよな

「ちょ、ちょっと待って二人共！」

「どうした沢田」「どうしました十代目」

「え、二人共こんな場所で戦ったもいいの？」

「知らない」「知りません」

だってオレ、売られたケンカは買う主義だからどこでも良いし

「まあまあ、やめろよ二人共。」

「はー、やめた。」

やる気が無くなった。

「チ、しょうがね十代目が言われただからだ」

「ツナすげなー。」

沢田サンキュー助かった

無駄な戦いはしたくなっかたからな

「チャオッス」

げ、また来た

「リボーン」「小僧」「リボーンさん」「・・・」

「お前、さっきの質問の答えがまだだぞ」

「・・・。じゃあ君は、私の正体に気づいて聞いているの」

気づいてるよなアルコバレーノのリボーン

私は君の上に立つ存在だよ

「ああ、気づいているだからこそ聞いている」

へへ気づいていたんだ以外

「それは、言えないすまないなアルコバレーノ」

「……。その言い方、お前の母さんは嫌いじゃなかったか」

コイツ、母さんの事ワザと言ってるだろ
ムカつくな

「ちょっと待て、リボーンと葛原さんって知り合いなの！」

「私の場合腐れ縁」 「知り合いだぞ」

「リボーンさんコイツは、天界の使用者ですよね！」

「そうだぞ」

いやな予感がする

「葛原、お前なぜ隠していた」

「いや、面倒なこと言ってもしょうがないし（焦り）」

「やっぱり勝負しろ！」

「いやだー！！！」

やっぱこうなるんだな（涙）
何で、オレの通り名聞いてこうなる。
ムカつくなーこゆうタイプ

「天下の天界の使い者もだめだな」

「何だとりボーンそれは、聞き捨てならんぞ」

「やってやろうじゃないの」

それから戦って

勝ったのはやっぱりオレ

でも獄寺も、もっと修行したら強くなりそう

ま、でもオレよりは無理だけだな

どーやって倒したっかて

『殴った』それだけです。

簡単でしたよ。

走って殴ったら反応出来ずに倒れてくれました。

第1話 リボーン来る！（後書き）

はーやっと終わった

つうかりボーン出てきても役目無しかよ

ユウが、大変そうだな

ユウ「なら、もう少し助けろよ」

作者「無理ですね。そして私の心を読むな！」

ユウ「ひどくね、そにしても自分のオリキャラに対しての扱い。」

作者「ユウって格闘技出来たっけ？」

ユウ「スルーすんな！」

作者「答えろや。」

ユウ「サーセン、一樣できる・・・ってか作者してるだろ
自分で書いてるんだから。」

作者「読者の皆さんのためだよ（笑顔）」

ユウ「ふーん、じゃあそろそろ」

作者&ユウ「これにて、第一は、おわりです。」

第2話 風紀委員長来る！

「ただいま」

て、言っても誰もいないけどな
両親二人共早く他界したからな。
ま、全然寂しくないんだけどね。

「オイ、さっさとメシ食べねーのか」

「わかったよ天竜」

あ、天竜は人じゃないから、妖刀だからね、
学校に連れていたし、お帰りとは言えないじゃん。（でも、しゃべるけどね）

何で、学校に連れて行ったかで、何があるかわからないから持って
行ったんだよ。

どうやって持って行ったのかって、コイツ、ネックレスになるんだ不思議だよ。

コイツの能力で、人の心が読めたりなど出来るからな、結構便利だ。

でも、コイツを扱える奴は、天竜が決めるし、
無理して使うと、重いし、鞘から抜けないから、扱える奴も少ない。

ま、コイツの説明はここまで、
さっさと宿題終わらせるぞ！↑ご飯食べながら説明してた。

～次の日～

「いってきまーす。」

はゝ、絶対何か起こるぞ、

だって、起きた時から嫌な感じがするからな。

獄寺に変な事を聞かれるのか、

リボーンに質問攻めにされるのか。

こんなもんで、終わって欲しい。

「はあゝ」

「お前、さっきからそればかりだな」

「（解ってるだろ）」

「ああそうだが」

うゝ、コイツ嫌だ（涙

オレのいじって楽しいか

やっぱり、コイツSだ、ドSだ！

ひどい、ひどすぎる。

「お前が、子供っぽいからだ」

「（何を言う！オレは子供っぽくない！）」

「ほら、そんなんで怒るのも子供だからだ」

「（うるさい！絶対に授業のときに話しかけんなよ）」

「はいはい」

くクラスの中く

「はあ」

「おはよう葛原さん」

「はよ、葛原」

「・・・。」（怒）

獄寺の奴、昨日の事まだ根に持っているのか。

「おはよう、沢田、山本、獄寺」

「どうしたの、葛原さん、ため息ばかりして」

「んん、気にしないでくれ」

「（え、まさか、昨日のリボンの質問が悪かったのかな）」

沢田が心配する目で見えてきた

え、オレ何かやったけ

うん悩んでも出てこない。

人の心を読むの嫌いだけど、やってみるか。

「沢田、お前は悪くないぞ、悪いのはリボンだからな」

「え！何で聞きたいことがわかったの？」

「え、何て言うか勘、そう勘」

えっと、これは言えないんだよ
そんな事言っただけ信じてもらったこと無いし。

「へーそうなんだ」

「ホームルーム始めるぞ」

嫌だなく先生の話って長いしつまらないし退屈だ

「ホームルーム終わるぞ」

やっと終わった

ん？あそこに居るは、学ランを着た男の子
・・・。この男の子の制服、学ランじゃないよね
誰だろう？

「ねえ、沢田あの学ラン君誰」

「あれは、ヒバリさんだよ」

「ヒバリ、鳥の名前の？」

「う、うん、並中の風紀を守ってるんだ」

「そうなんだ、あともう一つ」

「何？」

「沢田の事、『ツナ』と呼んでもいいか」

「え、いいよ。じゃあオレも葛原さんのこと『ユウ』って呼ぶね」

「わかった」

何でだ、オレが笑ったらみんなオレを見た
え、オレそんなに笑ってなっかたのかな（焦り

）放課後）

良かったまだ、何も起きていないって事は
今日の嫌な感じは、勘違いだよな）

「ねえ、君」

スルーたぶんオレに話しかけているんだよな。
ヒバリとかいう奴

「ねえ、君無視しないでくれる。」

「……。はいなんでしょうか」

「君、何でネックレスなんか持ってきてるの」

「母の形見だから」

嘘はついてないよ

コイツは元は母さんのものだからね

「ふーん、でも風紀を乱したから君を咬み殺す」

「へえ、やってみなよ」

「（僕が咬み殺すといっておびえない、面白い）」

トンファーを、何度も振り回すけど
全然当たらないよ。

まだまだよ、もう少し腕を上げたら
天竜使ってもいいかも。

「君、名前は」

「……。葛原ユウ、お前は」

お、咬み殺せないとわったかな

「雲雀恭弥」

「また、会いましょうヒバリさん」

「……。僕を怖がらない人が居たなんてな」

オレは何て事を言ってしまった

何が『また会いましょうヒバリさん』っだ

もう、会いたくない

会うたびに、攻撃くつらたら

オレ、死ぬかも・・・。

「死ねば良いんじゃないか」

「（酷くないか、天竜。でも、まだ嫌な感じが無くならない）」

「確かに、もうすぐ沢田達に何か起きるのではないのか」

「（それは、嫌だなツナ達は、久し振りに興味を持ったからな）」

オレは知らなかったもうすぐ、ツナ達の運命を変える物がやって
くるとは

第2話 風紀委員長来る！（後書き）

はあく書き終わったぜ！

今回は天竜&ヒバリさんが初登場！

と言う事なので、私のリア友の事を話します。

ユウ「どう言う事だよ（怒）」

作者「だって、私の友達ヒバリさんにとっても似てるからその事だけでもと思って」

天竜「その友達とやらに話して良いと

許可をもらったのか？」

作者「いいえ、私の友達（一部を除いて）小説書いてること知らないもん」

ユウ「オ、オイ良いのかよ、言って」

作者「多分、ばれたら、咬み殺されますね」

ユウ&天竜「なら、しゃべんなよ」

作者「サーセン」

これで、第2話終わります
それではまたの機会に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3475z/>

家庭教師ヒットマンリボーンと虹の守護者

2012年1月1日22時50分発行